

講座

公開講座「地域の子育て支援」

—子どもの成長・発達を願って—

Open Lecture “Community support in parenting”

— Hope for the growth and development of children —

國末和也*、野村和樹、小森武陸、上島 健
岸上雅彦、高瀬敏幸、山本和儀、富樫誠二

Key Words : 子育て、地域支援、発達、発達障害

1. はじめに

少子化が進んでいる現在、子どもの養育にかかる時間的・経済的比重が増えた一方で、心的側面での親子コミュニケーション不足が指摘されている家庭もある。子どもと向き合えず、子育てに違和感を抱いたり、子どもの発達過程や接し方に熟知していなかったりする養育者もいる。子どもの障害の有無に関わらず、子育てに戸惑いを感じている養育者もいる。また、子どもへの虐待をはじめとする養育者の事件が後を立たないという現状もある。

一方、教育面では、特別支援教育制度により、発達障害児に焦点を当てた教育的支援が始まった。子ども一人一人の教育的ニーズに応じた個別の支援計画を作成し、それに基づいた個別の指導計画により具体的に特別な教育的支援をしていくことになった。

このような現状の中で、家庭で養育する上で「気になる」子どもとその養育者への支援を目的として、公開講座を企画運営した。この支援

の基本的な考えとして、本学の特色でもあるリハビリテーションの3専攻、理学療法学、作業療法学、言語聴覚学の英知を連携的、統合的に活かすことにした。

この講座は、子どもへの具体的な接し方、理解の仕方を中心とした内容及び、貝塚市を中心とする「子育てネットワーク」について理解を進める内容を企画した。

目的

- (1) 子育てをする上で生じる不安や悩み、養育者の健康維持などに対して相談や支援を行う。
- (2) 理学療法学、作業療法学、言語聴覚学の3専攻の専門性を活かした市民向けの公開講座を行う。

対象

子育てをしている父母及び家族、療育・教育関係者

講座

- 第1回 8月30日(水)「家庭における養育の実際及び相談」
- 第2回 10月21日(土)「気になる子どもの理解と養育者の腰痛予防」
- 第3回 11月25日(土)「安心して生活できる地域支援ネットワーク」

※毎回、13時受付、13時30分～15時まで

*Kazuya Kunisue
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部
E-mail: kunisuek@kawasakigakuen.ac.jp

公開講座、15時から個別相談（希望者）、
託児有り

2. 公開講座までの動き

公開講座を通して、貝塚市の方々への地域支援を行うためには、貝塚市の協力が是非必要と考え、貝塚市に公開講座について理解をしていただくべき説明を行った。

2.1 第1回 連絡協議会

日時 5月31日（水）
議事 公開講座「地域の子育て支援」事業について
場所 貝塚市役所4階 都市政策部企画課
出席者 龍神和夫課長（都市政策部企画課）、
西秦幹雄課長補佐（都市政策部企画課）
富樫誠二、國末和也、野村和樹
内容 本学より公開講座の趣旨説明及び質疑
応答

2.2 第2回 連絡協議会

日時 6月15日（木）
議事 公開講座「地域の子育て支援」についての説明
場所 貝塚市福祉センター3階 会議室
出席者 龍神和夫課長（都市政策部企画課）、
西秦幹雄課長補佐（都市政策部企画課）
西 潔課長（健康福祉部障害福祉課）、
南 修作課長（健康福祉部児童福祉課）
今津宏三参事（教育委員会事務局学校
人権教育課）
富樫誠二、山本和儀、國末和也、野村
和樹、上島健、小森武陸、岸上雅彦
内容
(1) 本学より公開講座の内容説明（資料1）
(2) 質疑応答
○ 貝塚市より

- ・市として発達相談が行える箇所が少ない現状があるので、身近に相談できる場所が欲しいと考えていた。
- ・東小学校・西小学校にことばの通級指導教室があり、二分脊椎児が通っている学校もある。障害のある児童に対して具体的にどのような支援ができるのか。
- ・子育て支援事業と大学教育にはどのような関係があるのか。
- ・児童虐待についての相談が多くなっている。虐待についてはどのように考えているのか。
- ・貝塚市の公民館活動として「子育て支援ネットワーク」がある。その機関とも連携したらどうか。
- ・特別支援教育の研究指定都市に当たっている。コーディネータ研修等への講師派遣は可能か。
- 本学より
 - ・「子育て支援」等の活動は、地域に開かれた大学としての社会活動の重要な一側面である。積極的に利用していただきたい。
 - ・貝塚市が展開している「子育てネットワーク」にも参加し、子育て支援に関するネットワーク・システムへの一助になればと考えている。
 - ・講演派遣等には是非声を掛けていただきたい。
 - ・講座の中で、必要に応じて発達相談が受けられるよう計画をしている。今後、直接的な発達相談等にも応じられるよう体制も考えていければと思う。
 - ・行政の方と協力して講座を展開していきたい。テーマや内容については養育者や関係者等のニーズに応じて決定していきたい。
 - ・虐待については難しいテーマである。虐待を予防するような母子関係の改善等の内容も現在考えている。
 - ・個別のニーズに対しては、現状を把握してい

ないのでこれからの課題であるが、養育者や関係者、地域のニーズに応じて具体的に今後活動していきたい。

- ・この講座は今後とも継続していきたい。来年度以降につながる講座にしていきたい。

2.3 その他

第1回及び第2回連絡協議会後は、貝塚市、大学側の相互の担当者間で数回の調整を重ね、その結果、貝塚市より公開講座に対する後援名義が得られ、漸く実施に至ることができた。

3. 公開講座の実施

3.1.1 第1回公開講座の概要

講座名 「家庭における養育の実際及び相談」
期 日 平成18年8月30日（水）
来 賓 貝塚市都市政策部 企画課長
龍神和夫様
貝塚市都市政策部 企画課長補佐
西秦幹雄様
貝塚市健康福祉部 児童福祉課長
南 修作様
貝塚市教育委員会 学校人権教育課主管
藤田英明様
参加者 養育者 16名、専門職 5名、子ども17名
ボランティア学生
理学療法学専攻1年生 12名、
言語聴覚学専攻1年生 5名、
作業療法学科(河崎医療技術専門学校)
2年生 7名 計24名
スタッフ
富樫誠二、國末和也、野村和樹、上島健、山本和儀、高瀬敏幸、中松潔子、峰久京子、佐竹 勝、矢守麻奈、長辻永喜、古谷真敬、中辻伸英、川島康子
プログラム
13:30 開会

挨拶 河崎茂理事長

13:40 公開講座「家庭における養育の
実際及び相談」

講師：高瀬敏幸

14:50 閉会

挨拶 上好昭孝学長

15:10 個別相談（希望者）

3.1.2 講演の概要

「家庭における養育の実際及び相談」

講師：高瀬敏幸

子育ての危機を、信号の黄信号・赤信号にたとえて、保護者に警笛を鳴らした。保護者が子どもをかわいい、子どもと遊ぶのが楽しいと感じている時は大丈夫である。しかし、保護者が子どもと遊ぶと疲れ、子どもの欠点ばかりが気になるると子育ての黄信号である。子どもがきらい、子どもと一緒にいても楽しくないと保護者が感じたら子育ての赤信号である。赤信号の時は、専門家に相談するなどして、保護者が1人で悩みを抱え込まない方がよい。

子どもをかわいいと思うきっかけは、赤ちゃん時代の子どもの笑顔にあるが、ことばの育ちが気になる子ども達は、笑顔も含め大人に働きかける力が弱い。このため、子どもの反応をまわりの大人がうまく受けとめる必要がある。

安心できる子どもは、①目の輝いた子ども、②よく遊ぶ子ども、よく笑う子どもである。

気になる子どもは、①お友達とうまく遊べない子ども、②同じ遊びをいつまでもし続ける子ども、③笑顔の少ない子どもである。

この気になる子ども達は、小さい時には手がかからなかったとの報告が多い

<子どもと関わるコツ>

子どもとうまく関わるための以下1)～6)のコツを紹介した。

- 1) 努力して子どもを好きになる。
- 2) 子どもの長所を発見する。

短所も視点を変えれば長所になる。

例) 消極的で何もしない子どもは落ち着いた子どもととらえる。多動の子どもは、元気な子どもととらえる。

- 3) 子どもに働きかけたら子どもからの反応を待つ。

子どもの反応は時間がかかる。何らかの反応があったら、「〇〇したいのね」と子どもの気持ちをことば化する。

- 4) 子どもの意志を尊重して関わる。

子どもが受身的にならないように、何かをする時には「～してもいいですか?」と事前に子どもの意志を確かめる。この方法は、ことばがしゃべれない子どもにも有効である。

- 5) ほめて、ほめて育てる。

ほめて育てる方法は、小学校に行くまでは有効である。ほめて子どものやる気を引き出すことは簡単であるが、叱って子どものやる気を出すことは難しい。多くの場合、こどもは叱るとやる気を失う。

- 6) 対人関係が難しい子どもとの関係づくりは、以下の手順で行う。

①場所に大人がいても受けとめられる関係が第1歩である。

②見てないようで見ている関係へと発展させる。子どもから働きかけがあればすぐにまわりの大人が反応を返すことが大切である。

③大人が子どもの横に並んで子どもと同じ動作をする。子どもが興味を示したら、大人が子どもと少し異なることを行い行動の手本を示す。

例) 砂をコップから子どもが落としていたら同じように落とす。子どもがチラッと見たらコップをひっくり返して砂の「プリン」を作るなどの遊びの手本を示す。

④子どもと仲良しの大人が仲立ちになり波長の合いそうなお友達を探す。

⑤お友達との関係を広げる。

<ことばの指導原則>

以下、11のことばの指導原則を紹介した。

1) 子どもの興味を手がかりに指導する。

2) 子どもの体験をことば化する。

3) 同じ状況で同じことばを使う。

4) ことばかけはゆっくり行う。

5) ことばかけは前方から行う。

6) ことばかけは短くはっきりと行う。

単語と単語の間を少しあけて話すと、ことばが理解しやすくなる。

7) 否定語はなるべく使わない。「走らないで」という代わりに、「止まって」と言うと、子どもが理解しやすくなる。

8) 発達に応じたことばかけを行う。

9) 発音は訂正しない。

10) 子どもの話すことがわかったら「わかったよ」とサインを返す。

11) 聞く構えを育てる。

<ことばの指導テクニック>

その他のことばの指導テクニックを9つ紹介した。

1) 子どもの目の高さで関わる。

2) 子どもの行動をそのまま真似る。

3) 子どもの行動や気持ちをかわりにことば化する。

4) 子どもの言い間違いを、大人がさりげなく正しく言い直す。

5) ことばの意味や文法をひろげて返す。

6) にこやかな顔、明るい声で話しかける。

7) 物の名前を教える時は物の近くを指さす。

8) 物の名前を教える時は物を口のそばで示す。

9) 大人が会話のモデルを示す。

以上、家庭でのことば指導のコツを話し、最後に吹く訓練の指導方法の紹介、クリアファイ



図1 第1回講座「家庭における養育の実際及び相談」と託児の様子

ルを活用した書字動作の指導法、絵本の読み聞かせの実演を行った。

絵本の読み聞かせは、ポップアップ絵本や、絵が動くしかけ絵本、擬音がたくさん入った乳児用絵本など、家庭でもすぐ取り組めそうな身近な絵本を紹介した。

3.1.3 第1回公開講座を終えて

講座の内容は、アンケート結果（資料6）にもあるように好評を得ることができた。講座が始まって間もなくは、少し緊張感のある雰囲気の中で熱心に聞き入っていたが、絵本の読み聞かせの実際を行う場面では和やかな雰囲気になり、参加者と一体となった講座が展開された。

一方、託児場面でのボランティア学生は、初対面の子どもに対しても積極的な関わりをもってよく接していた。遊びの中で泣いたり嫌がっ

たりする子どももなく楽しく過ごすことができていた。このことは、ボランティアサークルに所属している学生が多く、ボランティアサークルでの事前学習が徹底していたこと、半数以上がボランティア経験者だということが功を奏した結果となっていた。また、作業療法学科2年生の中には、保育士、幼稚園教諭免許保持者もあり、子どもへの適切な働きかけが模範となり、他の学生に好影響を与えるなどの相乗効果をもたらしたものと推察される。今後、ボランティア学生の成長（教育）のためにもこのような経験の場の重要性が示唆された。

個別相談は、養育者の切実な悩みを聴く機会となり、養育に対する日々の苦悩を発散させる場にもなった。また、子どもの発達や行動の問題ということだけではなく、養育者自身が自己の問題として気づく場面も見られるなど、子どもを中心とした家庭支援については今後の課題と考えられた。

3.2.1 第2回公開講座の概要

講座名 「気になる子どもの理解と養育者の腰痛予防」

期 日 平成18年10月21日（土）

参加者 養育者 10名、子ども 11名
ボランティア学生

理学療法学専攻1年生 9名

言語聴覚学専攻1年生 2名

作業療法学科（河崎医療技術専門学校）
2年生 6名 計17名

スタッフ

富樫誠二、國末和也、野村和樹、小峯武陸、上島健、岸上雅彦、高瀬敏幸、中松潔子、峰久京子、長辻永喜、三輪レイ子、古谷真敬、中辻伸英、川島康子

プログラム

13：30 開会

13：40 公開講座「気になる子どもの理

解と養育者の腰痛予防」

講師：國末和也、岸上雅彦、
富樫誠二、小峯武陸、上島
健

阿部真二、山本泰史（河崎
病院リハビリテーション科）

14：50 閉会

15：10 個別相談（希望者）

3.2.2 講演の概要

講演1 「気になる子どもの理解」

講師：國末和也、岸上雅彦

「気になる」子どもをキーワードに発達障害の中でADHD（注意欠陥多動性障害）、LD（学習障害）、アスペルガー症候群、自閉症を取り上げ、その症状について簡単に説明をした。

- ADHD（注意欠陥多動性障害）児は、自分をコントロールする力が弱く、それが行動面となって現れるという特徴がある。ADHD児は、3つのタイプに大別することができる。(1)注意欠陥（ひとつのことに集中してられない）(2)多動性（じっとしてられない・しゃべりすぎ）(3)衝動性（出し抜けに何かをしてしまう）この行動様式は、7歳までに現れると定義されている。
- LD（学習障害）児は、読み書き計算力などに現れるという特徴がある。聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するという学習に



図2-a 第2回講座「気になる子どもの理解」の様子

必要な能力に生じる。知的な遅れはないが、読み書き計算などの能力のうち、1つまたは、2つ以上を身につけることができない、或いはうまく使えないという状態である。

- アスペルガー症候群の子どもは、コミュニケーションをとるのが苦手だという特徴がある。人と合わせることが苦手で、人の気持ちを想像することも苦手である。知的な遅れは目立たず、難しい言葉や漢字を知っていたり、計算能力が非常に高かったりする場合もある。また、興味のあることには長時間集中することができるが、同時に2つ以上のことをすることは苦手という子どももいる。
- 自閉症は、人と上手に付き合えない、コミュニケーションが取れない、想像力が乏しかったりこだわりがあったりするという特徴がある。目で見えたものを覚え、視覚的なものから理解することは得意だが、聴覚的なものから理解することが苦手な子どもがいる。感覚面では、非常に鋭い側面を持っているが、ある側面では逆に鈍いという側面も持つ。また、知的な遅れを併せ持つこともある。

次に、発達障害児が快適に生活し発達するための助言を次のように行った。

- ①できることから少しずつ継続的にすること
- ②一度に複数のことをするのではなく、一つのことから始めること
- ③ゆっくり時間をかけて行うこと
- ④養育者だけが悩んでいるのではなく、子ども自身も悩んでいること
- ⑤子どもの行動を温かく見守ること

また、子どもを見守る基本姿勢として、以下の「SOULの原則」の説明を行った。

- ①Silence 子どもが場面に慣れ自分から行動が始められるまで静かに見守る
- ②Observation 子どもが何を考えているのかよく観察する
- ③Understanding 子どもの行動には必ず意味があるのでそれを理解する

④Listening 子どものことばや行動、サインを見逃さない

最後に、インリアル法に基づいて、子どもの言語発達を促す望ましい対応の仕方 ①ミラリング ②モニタリング ③パラレル・トーク ④セルフ・トーク ⑤リフレクティング ⑥エクспанション ⑦モデリング について説明を加えた。

講演2 「養育者の腰痛予防」

講師：富樫誠二、小柰武陸、上島健、阿部真二、山本泰史（河崎病院リハビリテーション科）

子育ては心身共に疲労する大変な重労働である。人の腰部の構造は他の部位より比較的弱く、運動不足や体重過多の人は腰部の負担が助長され、腰痛になりやすいと言われている。子育て

をしている養育者は働き盛りであるが局所的な筋群を中心に身体を使っている事が多く、必ずしもバランスのよい運動を行っているとは限らない。したがって、主に養育者の腰痛のメカニズムと予防・治療方法について実技を交え紹介した。

実施内容は、次のとおりである。

- (1)腰痛を引き起こす原因の説明（担当：小柰、上島）
- (2)腰痛体操前のメディカルチェック及び身体評価（担当：阿部・小柰・富樫・上島・山本）
- (3)腰痛体操のアドバイス（担当：阿部・小柰）
- (4)腰痛体操後の身体評価（担当：阿部・富樫・上島・小柰・山本）

腰痛体操指導については、河崎病院リハビリテーション科理学療法で用いられている腰痛体操の指導用紙を用いた。また、配布資料は、河崎病院リハビリテーション科理学療法で用いられている腰痛体操の指導用紙及び、腰痛体操パンフレット（日本シグマックス株式会社より無償提供）等であった。

3.2.3 第2回公開講座を終えて

公開講座は、講義という座学と体を動かす実技の2部構成で行われたこともあり概ね好評であった。腰痛予防を目的として参加された方もおり、健康面へのニーズもあると感じられた。

「養育者の腰痛予防」の実技講座では、腰痛体操の効果を感じていただくために、まず、体操前後にて柔軟性や痛み等を検査した。体操後は改善した参加者多く、悪化した参加者はいなかった。今回は腰痛体操を中心に実施したが、今後、日常生活動作の指導も考慮した講座の必要性を感じた。また、河崎リハビリテーションセンターから理学療法士の協力が得られたことは、大学とリハビリセンターとの連携という意味でも有意義であった。

託児に関しては、子ども2名が頭をぶつける



図2-b 第2回講座「養育者の腰痛予防」の様子

という軽い事故（1名は床に、もう1名はホワイトボードペン受けに）が起きてしまった。幸いにもけがをするほどではなかったが、養育者には状況を説明したうえで謝罪し許しを得られた。狭い部屋での託児の限界やボランティア学生の慣れから起こったと考えられた。教室を一時的に託児室にしたこともあって、体を動かせる遊具やおもちゃが少なくスペースも限られていたため、子どもも学生もストレスがたまったものと推察される。今後、安全性を確保するために、事故が予想される可能性がある角へのクッション等の取り付けや危険箇所の包護を再検討することにした。

子育てをしている養育者にとって、託児の必要性は高く、託児があるから参加できる方もいる。そこで、学生を対象に、ボランティアに関する講義を実施することにした。また、ボランティア学生の育成という観点から、ボランティア意識の向上や理解を推進するために、ボランティア同士の情報交換会、発達障害児に関する基礎知識や対応の仕方の学習会を、第3回目の講座日に実施することにした。併せて、託児中に絵本の読み聞かせの師範も行うことにした。

個別相談については、第1回講座と同様に継続して希望される方が多く、公開講座日以外にも個別相談を希望される方がおられた。個別相談は、子育て支援事業の大きな役割の一つであると再確認し、将来的には、子どもが通園、通所している施設と連携を図り、養育者の支援を進めて行きたいと考えている。

3.3.1 第3回公開講座の概要

講座名 「安心して生活できる地域支援ネットワーク」

期 日 平成18年11月25日（土）

参加者 養育者 12名、専門職 8名、学生
6名、子ども 14名

ボランティア学生

理学療法学専攻1年生 13名
作業療法学専攻1年生 6名
言語聴覚学専攻1年生 1名 計20名

スタッフ

富樫誠二、山本和儀、國末和也、野村和樹、小森武隆、上島健、岸上雅彦、鈴木英鷹、高瀬敏幸、中松潔子、峰久京子、佐竹 勝、長辻永喜、古谷真敬、中辻伸英、川島康子

プログラム

13:30 開会

13:40 公開講座「安心して生活できる地域支援ネットワーク」

司会：山本和儀

講師：南 修作氏（貝塚市健康福祉部児童福祉課 課長）

朝日陽子氏（貝塚子育てネットワーク会長）

南 百合美氏（貝塚市立中央公民館）

海老原友子氏（貝塚市幼児教室 理学療法士）

指定討論者

鈴木英鷹、野村和樹

14:50 閉会

15:10 個別相談（希望者）

3.3.2 講演の概要

まず初めに、司会の山本より、一人一人を支えきる社会、仲間作りの輪を拡げる地域社会の大切さの説明を行った。

子育て支援は、行政だけではなく、専門家や地域も含めて協力し合って推進することがノーマライゼーションの理念にもつながる重要なことである。

南修作氏より、貝塚市の子育て支援の取組みのうち保育所の関係を中心に説明がなされた。

初めに、平成17年に作成した「貝塚市次世代育成支援行動計画」について、この行動計画は、保育に関する施策を重視しており、平成21年度までの計画をしている。保育所の定員増や延長保育、子育て支援事業の充実・拡大を目指している。できるだけ多くの市民の方に利用していただきたい。

全国的には少子化傾向であるが、貝塚市では平成13年あたりから保育所の入所希望者は増え続け、平成12年と比較すると、毎年100名程度の定員増で平成18年には1.5倍になっている。ニュータウンの開発がその要因の一つであると考えられるが、待機児童をなくすよう行政的努力をしている。また、子育て支援センター事業やファミリーサポートセンター事業を行い、養育者や児童へのサポートをおこなっている。また幼児教室では障害児へのサポートを行っている。

就学前の保育と教育の機能を併せ持った「認定子ども園」が平成18年10月にスタートした。現在、貝塚市にはないが将来的には設置されると思っている。今後とも行政として子育て支援に力を入れていく計画である。

南百合美氏より貝塚市の中央公民館活動について説明があった。

昭和28年に公民館ができた。当初は、人権問題、女性問題及び趣味に関することなどの生活に密着した活動を行ってきたが、女性の学ぶ権利を保障する講座として、昭和50年に保育付きの子育て講座が行われた。平成になって浜手地区・山手地区公民館ができ、子どもからお年寄りの方までを対象にした取組みを行っている。現在は3館それぞれ、子育て支援にも取り組んでいる。公民館で出会い、人と人が結び合い、元気になって地域に帰ってもらえるような活動をしている。人と人を繋ぐ活動を行っている。

「貝塚子育てネットワーク」が貝塚市にある。乳幼児部会、幼稚園部会、小学生部会、中高生

部会の4部会で構成され、それぞれ特色ある活動を行うと共に、縦のつながりも大切に活動もしている。お母さん方が気楽に相談できるネットワークづくりをしている。また、公民館としての講座や活動の資料を作ったり講師を依頼したりと、公民館は行政と子育てネットワークのパイプ役になっている。また、公民館としての支援は、①共催講座や会の運営における相談 ②講師謝礼や印刷代 ③活動場所の確保を行ったり、行政や他機関と子育てネットワークとのパイプ役を担ったりしている。

朝日陽子氏より、「貝塚子育てネットワーク」について具体的な取組みについての説明及び様々な取組みを写した写真の紹介もあった。

「貝塚子育てネットワーク」は、子育て真っ最中のお母さんやお父さん方が、中央公民館と一緒に、講座の開催やレクリエーションなどを通して子育てをする会で、今年で18年目を迎えている。年齢に応じて4部会に分かれ、親が主体的にそれぞれ活動を行っている。「学ぶ」「遊ぶ」「仲間づくり」「集う」「交わる」を大切に活動を進めている。

「遊ぶ」ことに関しては、学校週5日制になったときに、子どもの遊び場を作ろうという趣旨により、イベント的な内容になっているが、貝塚プレイパーク（貝塚市子ども野外広場）にて年4回活動を行っている。また、日常的な遊びの場をつくる目的で、毎週水曜日と第2・4土曜日に「遊ぼう！はらっば」（貝塚市子ども広場）を行っている。

親自身がやりたいことやできることを自主的に行うことを重視している。そして、互いに助け合いながら活動を進めている。今まで17年間続いてきたのは、同年代の子どもをもつ仲間同士のつながりや乳幼児期からのつながりがあったからだと思っている。ただ、一般的にサービスを受けることが多くなってきた現在、自主運営することが難しくなっている現状もある

が、部会やサークル同士の情報交換、「子育て」としての先輩会員のお話などを通して、子育ての悩みやしんどさを乗り越え、会員が協力しながら会の運営や活動を行っている。

子育てに関するネットワークを更に充実させたい。そのためには、支援する側が手をつなぐことが大切だと考えている。貝塚中の隅々まで、子育て支援の活動を広報することができたら、もっともっと、子育てがしやすい街になると考えている。

海老原友子氏より、幼児教室に関する説明がなされた。

昭和49年に貝塚保健所内に乳幼児健診で見つかったお子さんの基本的動作を中心とした訓練や自閉症児をもつ親の方々が交流する場として幼児教室が始まった。昭和62年には、貝塚市社会福祉協議会委託事業から、貝塚市児童課直轄の事業となり、発達遅滞児クラスと肢体不自由児クラスが毎日登園できるようになった。理学療法士や発達指導員等の配置もなされ、訓練内容も充実してきた。平成16年には、貝塚市保健・福祉合同庁舎内に改築・移転し、新たな幼児教室に生まれ変わった。常勤は保育士9名、看護師1名、理学療法士1名だが、非常勤として作業療法士、言語聴覚士も配属されている。脳性まひ、ダウン症、自閉症、発達に遅れなどのある様々なお子さんを対象にしている。以前は、施設を掛け持ちで療育や訓練を受けていたご家族の方がいたが、今は、あまり無理をしないで、家族、兄弟を大事にしながら子育てをするご家族が多く見られるようになった。

現在、通園を希望するお子さんは増えてきている。特に自閉症あるいは自閉傾向のお子さんが増加傾向にある。障害のあるお子さんが貝塚市で、集団の中で遊べる場を確保しながら、障害のあるお子さんもその家族もみんなが安心して暮らせる貝塚市にすることが課題だと感じている。障害のあるお子さんをもつ家族と一緒に



図3 第3回講座「安心して生活できる地域支援ネットワーク」の様子

手とつないで、療育をすすめていきたい。

指定討論者として、鈴木より以下のようなコメントがあった。

子どもの問題は親の問題である。親をいかに教育していくかが問題となっている。最大の問題はマニュアル社会であり、失敗を恐れ上手に行おうとする風潮が強い。また、社会が子どもを育てるという意識が欠けている。育児初心者には、知っている人に聞くという態度が必要である。人に頭を下げて問うことができない親が多く、また、受身的な人が多い現象が最大の病理であると考えている。子育ては目に見えないものである。そこで大切になるのが「ことば」である。「ことば」は生きているものなので、子どもたちを鼓舞し希望を与えるようなことば、情けのあることばを、どれだけ大人が子どもにことばがけできるかが重要である。

また、野村により以下のようなコメントがあった。

講師の方々のお話を伺い、貝塚市においては現実に即した子育て支援が細やかに行われている

るように感じられた。決して押し付けにはならない自然な感じでの貝塚子育てネットワークの様々な催し、公民館との連携、それを支援する行政がうまくつながり、よりよい子育て支援のネットワークが構築されている。

児童福祉法においては、児童が心身ともに健やかに育成されるよう、その責任を保護者のみならず国や地方公共団体にも認め、さらにすべての国民に努力義務として課している。児童の健全育成は国民全体の問題であることを意味しているのである。まさに貝塚市においては子育てネットワーク、公民館、行政と三者がそれぞれの立場で児童の健全育成に取り組まれ、その結果、今日の子育て支援のネットワークが築かれたように思われた。

また、児童福祉を法律の観点から見ると、児童福祉を支える法律としては児童福祉六法がまずあげられるのであるが、児童が健やかに育つためにはその他にも、教育に関わる法律、司法に関わる法律等々、様々な分野の法律が必要となる。その様々な分野の法律がいかに垣根を越え児童の最善の利益を尊重できるように関わることが問題となるのである。その一つとして、ネットワーク活動の取組みの中であって、小学生部会や中学生部について、学校とのつながりについて興味を覚えた。児童の生活において、学校で過ごす時間のウエイトはかなり重く、学校と児童のかかわりと子育てネットワークについて気になった。今回講演していただいた方々はもちろんのこと、教育委員会、教育現場および保育現場を含めた講演会の機会を実現し、ネットワークと教育現場、保育現場が連携しよりよい子育て支援のネットワークを実現していただきたい。

最後に、山本は、この講座を一つの機会として行政、貝塚子育て支援ネットワーク、大学がもっと連携を深められればとまとめた。

3.3.3 第3回公開講座を終えて

講師の話は分かりやすく好評であった。子育てネットワークと幼児教室、行政の関係等の質問があったが、時間の都合上、質問や情報交換が十分にできなかったは残念であった。しかしながら、子育てに関する行政としての取組みや公民館活動、市民組織として子育て支援をされている貝塚子育てネットワークの活動、そして、障害のある子どもへの理学療法士としての指導などの情報交換ができたことは有意義であった。

子育て支援に関するネットワークが深まり、さらに広がり、子育てをされている全ての方々に支援が行き届けばと感じられた。貝塚市にある本学としての責務の重さも再確認された講座であった。

4. 託児及びボランティア

親子で参加できるという本公開講座の性質上、また講座に引き続き、希望に応じて個別相談を実施することもあり託児は避けられないことである。

託児を実施するにあたり、託児施設、託児を受け持つ人材、まずこの二点の問題があった。

託児施設については、使用可能な施設が大学の教室であるため、黒板・教室の角・床等、託児には適さない箇所が多々目についた。その一つ一つを例えば床にはマットを敷き、角には段ボールを重ねてクッション代わりに貼り付ける等教員・職員・学生自らの手仕事で解消した。

託児を担う人材としては、貝塚市社会福祉協議会より託児ボランティアの派遣も好意的に申し出ていただいたこともあり、ボランティアを募ることとなる。実際にボランティアを募ると、本学のボランティアサークルならびに本学の前身である河崎医療技術専門学校生の協力が得られた。それに加え一般に応募してくれた学生と

託児にあたるには十分なボランティアを揃えることができた。

初回の託児を受け持つにあたり、ボランティア養成講座の実施も協議したのであるが、託児児童の特定が難しく短期間で実際に活用できるような講座を開催することは難しいとの結論に至った。短期間に知識だけを与えることで託児場面において過剰に緊張をさせ、強張った顔で託児にあたることになるよりも、適度な緊張感を持ちつつも、笑顔でリラックスできる方がよいということで、特に事前学習をすることもなく、諸注意を与えるに留まった。また、講座当日、作業療法学専攻長辻教授、ボランティアサークル顧問で理学療法学専攻峰久准教授の協力を得られたことも、この結論に至った大きな理由であることを申し添えておきたい。

すでに終了した2回の公開講座における託児を顧みて、第1回目の公開講座と比べると第2回公開講座の託児においてはボランティアに参加している学生に余裕が見られた。本学は医療に従事する専門職を養成する機能を持つ大学であるので、安全に託児業務を遂行するのみに留まるのではなく、よりよい託児を目指すことを通し学生自身の成長の一助になればという考えや、この余裕が“なれ”に繋がるのを防ぐためにもボランティア特別講座を野村が社会福祉学の講義の一環として実施した。

まず総論として、岡本栄一らによるボランティア論に従い、ボランティア活動の精神的根幹をなす理念としてボランタリズムについて、次いではボランティアの基本的性格について「自発性・主体性」「公共性・福祉性・連帯性」「無償性・非営利性」「自己成長性」「継続性」の5つの視点から解説した。

先にも述べたように、この特別講座を開講する目的の一つである学生自身の成長を念頭に、「自己成長性」および「継続性」に重点をおいて講義した。また、周知のようにボランティア



図4 託児の様子

活動の定義は多くのものが示され、統一された定義がないのが現状である。したがって、「自己成長性」および「継続性」について事例を交えて解説することにより学生が個々の活動体験を基にそれぞれの定義づけを行っていきけるよう試みた。

各論としては、高瀬、國末がそれぞれ本公開講座第1回目および第2回目に講演をもとに、障害及び児童の発達について解説した。

5. おわりに

大学開学1年目に、「地域の子育て支援」講座を3回実施することができた。講演をとおして、子育てをする上で生じる養育者の不安や悩みを共有し、子どもへの理解を促すことができ、また、健康維持に関する実技講義により、養育者自身の健康への関心を高めることもできた。理学療法学、作業療法学、言語聴覚学の3専攻の専門性を活かした成果だと考えられた。

講座の内容、運営の仕方、託児、ボランティアなど多々反省点や改善点が挙げられるが、「子育て」というキーワードで、地域の方々への支援がリハビリテーションを専門とする大学としてできたのではないと考えられる。来年度も継続して公開講座「地域の子育て支援」を実施したいと考えている。

謝 辞

この講座を実施する上で多大なるご協力をしていただきました、貝塚市都市政策部企画課 課長 龍神和夫様、同課 課長補佐 西秦幹雄様、健康福祉部児童福祉課 課長 南修作様を始め、貝塚市の各担当課長様にお礼申し上げます。さらに、貝塚市子育て支援センター、貝塚



図5 公開講座（第3回）のスタッフ

市幼児教室、各公民館の関係者の方々にもお礼申し上げます。

また、第2回目の講座を担当していただきました河崎病院リハビリテーション科理学療法士の阿部真二先生、山本泰史先生、第3回目の講座で講師になっていただきました、南修作様（貝塚市健康福祉部児童福祉課 課長）、朝日陽子様（貝塚子育てネットワーク会長）、南百合美様（貝塚市立中央公民館）、海老原友子様（貝塚市幼児教室 理学療法士）には重ねて厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、この講座を運営するにあたり、河崎茂理事長、上好昭孝学長、矢守麻奈教授、佐竹勝教授、峰久京子准教授、鈴木英鷹教授、長辻永喜教授、三輪レイ子教授、古谷真敬氏、中辻伸英氏、川島康子氏、中松潔子先生（水間病院言語聴覚士）、そして、ボランティアサークルを中心とした本大学1年生有志、河崎医療技術専門学校2年生有志の諸君には会場設営や託児に関して多くのご協力をいただきましたことにお礼申し上げます。

【参考文献】

岡本栄一ら, 2005年, 『ボランティアのすすめ』, ミネルヴァ書房

資料1 第1回連絡協議会プレゼンテーション

<p> 大阪河崎リハビリテーション大学</p> <p>公開講座 「地域の子育て支援」(案)</p> <p>—子どもの成長・発達を願って—</p> <p>平成18年6月15日</p> <p>1</p>	<p>スタッフ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●理学療法学専攻 富樫誠二、山本和徳、小倉武雄 ●作業療法学専攻 上島 健、岸上雅彦 ●言語聴覚学専攻 野村和樹、國東和也 ●事務局 古谷真樹 <p>2</p>	<p>大学の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ノーマライゼーションの理念の中心的役割を担う、リハビリテーション医療のスペシャリストを育成 ●理学療法学、作業療法学、言語聴覚学 ●地域社会への貢献 <p>3</p>
<p>公開講座の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ●成長・発達過程で起こりうる問題をもつ子どもやその家族に対する支援及び特別支援教育に関わるレクチャー ●子育て支援 ●子どもへの支援 ●対象：子育て上悩みをもたれている養育者、本人、療育・教育関係者 <p>4</p>	<p>作業療法学専攻の立場から</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日常生活における具体的方法の支援 □食事、排泄、更衣、入浴等 ●遊びを通して学習の支援 ●第2次成長に伴う学習・療育支援 ●他者との関わりの円滑化 <p>5</p>	<p>日常生活の支援</p> <p>●うまく行えない動作</p> <p>↓</p> <p>●望ましい方法</p> <p>6</p>
<p>生活面での、養育者の不安、困りごとを解決</p> <p>・小学校低学年～高学年 第2次成長に伴う問題 体重増加、子どもと親の関わり 療育面・介護面の個別的な問題 学校での課題についていけなくなる時期</p> <p>7</p>	<p>遊びを通して、学習場面で予測される問題点に対し、解決の糸口を探る</p> <p>・他者との関わりが、円滑にできないのはなぜか？ということを選びを通して評価する</p> <p>8</p>	<p>理学療法学専攻の立場から</p> <ul style="list-style-type: none"> ●養育者からの相談 (動作介助、福祉用具のサポート 等) ●子どもからの相談 (動作へのアドバイス、身体測定 等) <p>9</p>
<p>養育者からの相談 (動作介助、福祉用具のサポート 等)</p>  <p>10</p>	<p>子どもからの相談 (動作へのアドバイス、身体測定 等)</p>  <p>11</p>	<p>言語聴覚学専攻の立場から</p> <ul style="list-style-type: none"> ●コミュニケーション(ことば・聞こえ)に関する支援 □言語発達障害、吃音、構音(発音)障害 □広汎性発達障害・LD・ADHD □難聴(補聴器・人工内耳) ●家族支援 ●特別支援教育 <p>12</p>
<p>「話すこと・聞くこと」への関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ●乳幼児健診～ □新生児聴覚スクリーニング ●補聴器・人工内耳 □定期健診 <p>「聞こえない」「ことばが通い」「行動が落ち着かない」</p> <p>子ども、家族への支援</p> <p>13</p>	<p>「ことば・心」のキャッチボール</p> <ul style="list-style-type: none"> ●母子コミュニケーションへの支援 ●家族支援 □子どもは家族との関わりの中で育つ ●ことばの発達に応じた支援 ●コミュニケーション能力の育成  <p>14</p>	<p>特別支援教育への関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ●軽度発達障害をもつ子どもたちへの支援 □学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、高機能自閉症 □地域社会への理解(啓発活動) ●個別の教育支援計画、個別の指導計画 ●家族への支援 <p>15</p>
<p>専攻を超えて</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域支援＜連携＞ □家族、本人 □兵庫県、療育・教育関係者、民生児童委員 □保健所、児童相談所 等 ●ボランティア養成講座への関わり ●日常生活支援 <p>16</p>	<p>テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第1回 家庭における養育の実態及び相談 ●第2回 気になる子どもの理解と養育者の腫瘍予防 ●第3回 安心して生活できる地域支援ネットワーク <p>17</p>	<p>会場・日時</p> <ul style="list-style-type: none"> ●会 場 本学1号館・2号館 ●第1回 8月30日(水)13:30～15:00 ●第2回 10月21日(土)13:30～15:00 ●第3回 11月25日(土)13:30～15:00 ●受付13:00～ ●15:00以降個別相談・発達検査 <p>18</p>

資料2 第1回公開講座アンケートから

1. 講座の内容は、予想されていた内容でしたか。

- ①予想していた内容（12名） ②どちらかともいえない（5名） ③違った内容（3名）

2. 講座の内容はいかがでしたか。

- ①よかった（19名） ②どちらともいえない（1名） ③よくなかった（0名）

3. 公開講座で取り上げてほしいテーマがございましたらご記入下さい。

- ・ 自閉症
- ・ 乳・幼児の教育
- ・ メディアと子育てについて
- ・ 訓練外で家庭で取り組める様なこと
- ・ 食事（すききらいをなくすための方法）について
- ・ 歯について
- ・ 老後のいきがい、リタイア後の生活
- ・ 発達のチェックポイントについて
- ・ 生活リズムと子どもたちのすこやかな成長、障害児指導

4. 公開講座に望まれることがあればご記入下さい。

- ・ とても楽しく勉強になりました。どうもありがとうございました。
- ・ 子どもと一緒に遊ばせることをして欲しい、実際に本を読みきかせ、リトミック体操など
- ・ 定期的に数回に分けてもう少しほりさげてお聞きしたい
- ・ 子どもへのものを続けてやってほしい
- ・ 身体的な発達のホローの方法・マッサージの方法など
- ・ もっと広く知らせほしい

資料3 第2回公開講座アンケートから

1. 講座の内容は、予想されていた内容でしたか。

①予想していた内容（4名） ②どちらかともいえない（2名） ③無記入（1名）

2. 講座の内容はいかがでしたか。

①よかった（6名） ②どちらともいえない（1名） ③よくなかった（0名）

3. 公開講座で取り上げてほしいテーマがございましたらご記入下さい。

- ・障害児の性教育
- ・肩こり講座
- ・ノンバーバルメディアと子育て

4. 公開講座に望まれることがあればご記入下さい。

- ・続けて欲しい
- ・とても良い印象を持っている
- ・託児つきがよい
- ・もっと地域の養護学校や通園施設にPRした方が良いのでは

資料4 第3回公開講座アンケートから

1. 講座の内容は、予想されていた内容でしたか。

- ①予想していた内容（6名） ②どちらかともいえない（7名） ③違った内容（4名）

2. 講座の内容はいかがでしたか。

- ①よかった（15名） ②どちらともいえない（2名） ③よくなかった（0名）

3. 公開講座で取り上げてほしいテーマがございましたらご記入下さい。

- ・子どもとのつきあい方やしつけなど
- ・障害児の学童保育とボランティア（地域）の確保のポイント
- ・障害児と地域の関わりや子どもの地域リハビリに関わる問題と解決法など
- ・発達障害児に対する子育てのポイント
- ・連携について、特に発達障害児について
- ・障害児保育、統合教育の問題について
- ・ノンバーバルメディアと子育て
- ・食育について

4. 公開講座に望まれることがあればご記入下さい。

- ・続けて欲しい
- ・託児つきの講座を継続して欲しい
- ・住民との意見交換や討論会